武蔵野日曜集会

キリストの本願体受体現

――ピリピ書第2章19節～3章21節――

１９９２年４月５日（武蔵野）
小池辰雄

キリスト体受　十字架の血のバプテスマ　キリスト・イエスを求めよ　自己中心かキリスト中心か　信愛関係　全存在で体受体現　追求する原動力　国籍は天にあり　霊の体あり

【ピリピ2】

19われ汝らの事を知りて慰安を得んとて、速かにテモテを汝らに遣さんことを主イエスに頼りて望む。20そは彼のほかに我と同じ心をもて真実に汝らのことを慮ぱかる者なければなり。21人は皆イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを求む。22されどテモテの錬達なるは汝らの知る所なり、即ち子の父に於ける如く我とともに福音のために勤めたり。23この故に我わが身の成行を見ば、直ちに彼を遣さんことを望む。24我もまた速かに往くべきを主によりて確信す。25されど今は先われと共に働き共に戦いし兄弟、すなわち汝らの使として我が窮乏を補いしエパフロデトを、汝らに遣すを必要のことと思う。26彼は汝等すべての者を恋いしたい、又おのが病みたることの汝らに聞こえしを以て悲しみ居るに因りてなり。27彼は実に病にかかりて死ぬばかりなりしが、神は彼を憐みたまえり、啻に彼のみならず、我をも憐み、憂に憂を重ねしめ給わざりき。28この故に急ぎて彼を遣す、なんじらが再び彼を見て喜ばん為なり。又わが憂を少うせん為なり。29されば汝ら主にありて歓喜を尽して彼を迎え、かつ斯くのごとき人を尊べ。30彼は汝らが我を助くるに当り、汝らの居らぬを補わんとて、己が生命を賭け、キリストの事業のために死ぬばかりになりたればなり。

【ピリピ3】

1終に言わん、我が兄弟よ、なんじら主に在りて喜べ。なんじらに同じことを書きおくるは、我に煩わしきことなく、汝等には安然なり。
2なんじら犬に心せよ、悪しき労動人に心せよ、肉の割礼ある者に心せよ。
3神の御霊によりて礼拝をなし、キリスト・イエスによりて誇り、肉を恃まぬ我らは真の割礼ある者なり。4されど我は肉にも恃むことを得るなり。もし他の人、肉に恃むところありと思わば、我は更に恃む所あり。5我は八日

めに割礼を受けたる者にして、イスラエルの血統、ベニヤミンの族、ヘブル人より出でたるヘブル人なり。律法に就きてはパリサイ人、6熱心につきては教会を迫害したるもの、律法によれる義に就きては責むべき所なかりし者なり。7されど曩に我が益たりし事はキリストのために損と思うに至れり。8然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思い、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥のごとく思う。9これキリストを獲、かつ律法による己が義ならで、唯キリストを信ずる信仰による義、すなわち信仰に基きて神より賜わる義を保ち、キリストに在るを認められ、10キリストとその復活の力とを知り、又その死に效いて彼の苦難にあずかり、11如何にもして死人の中より甦えることを得んが為なり。12われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉えんとて追い求む。キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。13兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、14標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したもう召にかかわる褒美を得んとて之を追い求む。15されば我等のうち成人したる者は、みな斯くのごとき思を懐くべし、汝等もし何事にても異なる思を懐き居らば、神これをも示し給わん。16ただ我等はその至れる所に随いて歩むべし。

17兄弟よ、なんじら諸共に我に效うものとなれ、且なんじらの模範となる我らに循いて歩むものを視よ。18そは我しばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。19彼らの終は滅亡なり。おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地の事のみを念う。20されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。21彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて、己が栄光の体に象らせ給わん。

●キリスト体受

19われ汝らの事を知りて慰安を得んとて、速かにテモテを汝らに遣さんことを主イエスに頼りて望む。

ピリピ書は、パウロがローマの牢屋において書いた、おそらくこれが最後の書翰です。しかも、

「喜べ、喜べ」

というんですからね、パウロは。テモテは、自分の子供みたいな大事なお弟子さんです。また、テモテはパウロを父のように慕っていた。もちろん、両方とも、キリストが中心です。

20そは彼のほかに我と同じ心をもて真実に汝らのことを慮(おもん)ぱかる者なければなり。

これは本当に私と一つとなって君たちのことを思っているんだ、と。

21人は皆イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを求む。

ギリシア語でいうと、この「事」というのは、「タ」という短い言葉です。「タ　クリスティ」「キリストの事を」という複数なんです。パウロさんは少し詳しく言いすぎてしまった。むしろ、「事」なんて言わないで、

「キリストを求める」

と書いてもらった方が、私はいいと思うくらいです。

「キリストがこうした、ああした。どうだこうだ。また、こうしてくださる」

というようなことでなくて、まずキリストそのものを求めないと。山上の大告白に、

「求めよ、さらば与えられん」

と。キリストは、何を求めるかは何もおっしゃらない。

「我を求めよ」

ということなんです。そしたら、

「我をやるぞ」

という。キリストをいただいたら、他はもう何も要らない。

私は今日ここに、「キリストの本願体受」と書いたが、「キリスト体受」でいいんです。「本願」は、「御意(みこころ)」ということです。御意を体受する。

「キリストそれ自身を求めれば、必ずやるよ」

「私は全的に私自身をお前にやるよ」

と。もう非常に簡単なんです。キリストは、

「父よ！」

と祈られると、その一語でお父さんの中へ入ってしまう。私も、

「主さま！」

と――何も大きな声を出さなくたって沈黙の叫びでいい――そうすると、キリストの中へ入ってしまう。だから、

「主さま！　アーメン！」

と。これは一番簡単な祈りで、一番深い祈りです。

何しろ、聖書の注解というのは余計なことばっかり言っている。聖書は、本当は注解は要らない。聖書は、聖句自身が注解になっている。聖句自身が力をもっている。ギリシア語でもヘブライ語でもない。神の根源語です。日本語や、ドイツ語や英語でも、何語でもいい。その奥から響いてくる、その響きを受けとる。そういう読み方をしないとダメなんです。

「この意味はどうだ、こうだ」
と、意味ばっかり考えている。ドイツ人なんかは、意味のディスカッションが好きなんだ。
「なぜ、そんなにディスカッションをするか、要らんじゃないか」
と。私はドイツの教会でお話したことがある。副牧師が
「どうしてそういう心境になったか？」
と聞くから、私は、
「聖霊を受けたからです」
と答えた。それで、私は向こうの新聞に、
「今のルター教会の急務は聖霊を受けとること。そのためには、しっかり十字架を受けとれ」
と書いてやった。

●十字架の血のバプテスマ

時々、私は言いますね、ルカ伝12章49節、非常に大事な言葉です。
「我は火を投ぜんとて来れり」
「火」とは聖霊のことです。聖霊を投じようと思ってやって来た。
「されど我には受くべきバプテスマあり」
キリストが受けるバプテスマは血のバプテスマなんです。十字架の血、自分の血でもって自分をバプテスマする。
「思いせまること如何ばかりぞや」
「まず十字架に架かって贖罪の血を流さなければ、聖霊はやれないんだ」
と、こういうことなんです。だから、地上においては、ペテロもヨハネもヤコブも聖霊を受けなかった。
「私が十字架に架かって天界に往って、それから祈って待っていろ、そうしたら聖霊を与えるぞ」
と。あのルカ伝12章49節をみんないい加減にしているんだ。冗談じゃない。パウロさんが言った、
「我、キリストと共に十字架せられたり。もはや、我生くるにあらず、キリストわが中にありて生くるなり」
とは何ですか。御霊のキリスト、キリストの御霊です。プロテスタントはあれを金科玉条にしている。それでありながら、あのパウロの言葉がひとつも身に付いていない。
十字架は、過去・現在・未来の、人間小池の罪なんてものは全部、贖いとったから心配要らん、と。「罪」とは何ですか。神さまから反(そ)っていることです。「的(まと)はずれ」というのが罪ということ。的が外れている。我執、エゴイズムです。

「万人は罪びとなり」
ということは、
「万人はエゴイストなり」
ということ。むしろ、そう言った方がよく分かる、「罪びと」なんていうよりも。
「別に悪い事はしません」
なんて冗談じゃない。みんなエゴイストだ。

●キリスト・イエスを求めよ

日本の民主主義なんてものは何ですか。「アンダー　ゴッド」と、リンカーンは言っているんだ。

“American government must be under God,
of the peopl, by the peopl, for the peopl, forever.”

「神の下において、国民の、国民によるところの、国民のための政治でなければならない」
と。
「神の下において」（アンダー　ゴッド）
という言葉が抜けているんだ、日本では。こんな民主主義はいつまでたってもダメですよ、これでは。
あなた方、一人一人は非常な使命を持っている。この福音を受けたならば、存在が即、使命である。使命とはキリストを伝えること、何をしていても。
人生は、みなそれぞれ、神さまからの課題をいただいたら、それは神さまの栄光が現れますから、力が来てしょうがない。
「キリスト・イエスを」求めればいいんです。「キリスト・イエスの事」ではない。
「キリスト・イエスを求めよ、そうしたら、キリスト自身は無条件にくださる」
と。十字架のキリストを、聖霊のキリストをくださる。
マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を読んで、このキリストにぶつかって、
「参りました、降参しました！」
と言うと、キリストにとっ捕まる。そして、その力で、今度は楽しくてしょうがない。
福音書は意味ではない。ナポレオンがセントヘレナに流されて、福音書を開いたら、
「これは文字ではなかった、生き物だった」
とナポレオンはびっくりした。さすがは、ナポレオンです。だから私は、
「聖書は大ドラマだ」
と言っている。
「ドラマの中に入れ、そして、キリストにとっ捕まれ。そしたら、福音書の扉が開

かれる」

と。

「ギリシア語ができたら、聖書はよりよく分かる」

なんて、冗談言うなと。全部、キリストの光で見えるんです。そして、ちゃんとそれを位置づけることができる。

22されどテモテの錬達なるは汝らの知る所なり、即ち子の父に於ける如く我とともに福音のために勤めたり。

パウロが「子の父に於ける如く」というのは、

「あれは私の子だよ、私は彼の父だよ」

と。

「キリストの父なる神におけるが如く」

というところから来ているわけです。

それから、あとはエパフロデトの事は今日は略します。よく、パウロのために面倒をみてくれた人です。これも大事な人です。

●自己中心かキリスト中心か

それから、3章にいきます。

1終に言わん、我が兄弟よ、なんじら主に在りて喜べ。なんじらに同じことを書きおくるは、我に煩わしきことなく、汝等には安然なり。

「主を喜ぶ」のではない。「主に在りて喜ぶ」、主の中に入ってそこで喜ぶ。この「に在りて」が大事なんです。

「エン・クリスト」「イン・クライスト」

です。そうすると、楽しい。天的な楽しさです。

2なんじら犬に心せよ、悪しき労動人に心せよ、肉の割礼ある者に心せよ。

イスラエルでは、犬というのは――普通は非常に忠実な動物として犬をほめるけれども――何か汚れたものの代名詞みたいになっている。

3神の御霊によりて礼拝をなし、キリスト・イエスによりて誇り、肉を恃まぬ我らは真の割礼ある者なり。

「キリスト・イエスによりて」ではなく、これも「にありて」です。ユダヤ人は「割礼」という儀式を、八日目にやりますけれども、それをパウロはここで「肉」と言っている。人間本位のことを肉というんです。自己本位のこと。日本の民主主義は肉だ。肉体ということではない。それから単なる肉情のことでもない。肉情それ自身は何も悪くも良くもない。神さまが与えた一つのものだからね。肉というのは自己中心のことで、一番、罪の悪いのは、いつわること、たばかること。偽り、たばかりはむさぼりよりかなお悪い。それから、策略。

世の中は策略だらけでしょ。いい加減な偽りをして。それを非常に藤井先生は憤慨していたものだから、「真実、真実」と言っておられた。

「**真の割礼ある**」

というのは、生まれつきの我々の心は裂かれた。そして、新しい天的な心に切り替わった。これが「真の割礼」です。人間のいただいてある、自然のいろいろな、理性、悟性、感性はみんな悪くはない。しかし、それが自己中心になるから、みんなこれは困ったものだ。それが神・キリスト中心になって、それで回転していけば、これが「霊」です。自己中心で動くものは、どんなに良さそうに見えても、これは「肉」という。パウロの「霊・肉」の使い方は根本的にはそうなんです。自分の名誉のためだとか、財産のためだとか、それはみんなダメ。

もし、肉即ち自分の血統をいうならば、ユダヤ人のエリートの伝統を持っているということを、パウロはそこから言っているわけだ。

4 されど我は肉にも恃むことを得るなり。もし他の人、肉に恃むところありと思わば、我は更に恃む所あり。5 我は八日めに割礼を受けたる者にして、イスラエルの血統、ベニヤミンの族、ヘブル人より出でたるヘブル人なり。律法に就きてはパリサイ人、

「パリサイ」というのは、律法をよく知りかつ守っているご連中のことで、他をさげすむ。

「俺たちは本当に義しいんだ。あの連中はダメだ」

と、自らを誇っている。これをパリサイ根性という。パウロはかつては

「俺はユダヤ教のチャンピョンだ」

と、それで熱心だった。自己中心の熱心は一番あぶない。霊的な自己中心の熱心が最大の罪なんです。それだから、キリストにやっつけられた。

「**サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！**」

と、復活のキリストにひっくり返された。

「これはもうひっくり返さなければどうにもならない」

と。大変なもんだ、あれは。使徒行伝9章、22章、26章に書いてある。

いゃね、本当に、福音というのは大変なんだよ。しっかりつかむ人が少ないんでね。

「本当のクリスチャンは天才より少ない」

とキルケゴールが言ったくらい。だけれども、

「モーセの律法を自分は守ったなんて、とんでもない話だ、自己中心であった」

と。

●信愛関係

「律法」というのは本当は、

「汝、殺すなかれ」
ではない。
「汝は殺人はしない。私がお前の神だから、殺人なんかしないね」
という断定的な気持が、あの十誡の本当の意味なんです。あれは「十誡」ではなく、「十言」なんです。イスラエルの民を信じてかかっている。親が子を信じなかったらどうなるんですか。子が親を信じなかったらどうなるんですか。信愛関係が、学校でも会社でも家の中でも、全部これは信愛関係です。信愛関係がないところに、組合なんていうのができる。信愛関係は楽しい。何のかんのと疑っていたらダメなんだ。

6 **熱心につきては教会を迫害したるもの、律法によれる義に就きては責むべき所なかりし者なり。**

そこで、パウロは、
「これは律法の義どころでない。間違えた。とんでもない自己中心のものだった。私はできるなんて思ったのは大間違いだった」
と気が付いた。律法は本当は相手を信じてかかる。律法の本当のところを歴史的に間違った。本当は隠れたる福音だったんです。それを、イスラエルはいわゆる「律法」にしてしまった。
「殺人はしない。嘘はつかない。むさぼらない。姦淫はしない。父母を敬う」
と、みんな断定している。
福音の世界は断定してものを言っている。
「そのうちに、そうなるであろう」
ではない。讃美歌でも、「…したまわん」ではない。「…したもう」と、現在で歌わなければダメです。讃美歌を歌うときも、魂を込めて歌わなければ。
過去をも引き上げ、未来も引き寄せる、「永遠の現在」というものに生きる。「永遠」というのは時間の長さではない。滅びないということです。不滅の現在ということ。質的なんです。

7 **されど曩(さき)に我が益たりし事はキリストのために損と思うに至れり。**

益だの損だのと言っているね、この訳が。ギリシア語も、ちょっとそれに似た言葉だけれども。益だの損だのという言葉は、損得みたいで、私は嫌いなんだ、この訳し方は。
「さきに価値ありしもの、今はキリストの故に、価値なきものとなった」
と訳したい。損得勘定はダメなんだ。

●全存在で体受体現

8 **然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優(すぐ)れたるために、凡ての物を損なりと思い、**
無価値と思い、
彼のために既に凡ての物を損せしが、

失ったが、

之を塵芥（あくた）のごとく思う。

その通り。「イエスを知る」という言葉がまたつまずきになる。キリストと本当に一つとなる、それが本当に知るという世界です。あたまで知るのではない。体（からだ）で知るんです。私は「体」という字をよく使う。体ということは全存在ということです。体受は全存在で受けとる、体現は全存在で現ずるということ。それが言葉であろうと、行為であろうと、それが全部、全存在的でなければダメなんです。

何をするのでもそうです。棟方志功が素晴らしい絵を描けるようになったのは、体で描くようになったからです。手で書いているのではない。あれもやっぱり宗教の世界に入ってからだ。

「私の中に宗教が生きだした」

と言っている。

ユダヤ人は、義のことが非常に問題になるものだから、

9これキリストを獲、かつ律法による己が義ならで、唯キリストを信ずる信仰による義、すなわち信仰に基（もとず）きて神より賜わる義を保ち、キリストに在るを認められ、

「義」とは何ですか。「神さまの御意」が「義」なんです。神さまの御意を行ずる人が「義人」なんです。それを手放しでできる人は一人もいない。だからパウロが、

「義人なし、一人だになし」

と言った。キリストだけです。例外はキリストだけ。そのキリストはなぜ義人かというと、

「自分は何もできません、何も言えません。どうぞ、私の中に言をください、私の中に力をください」

と、全部神さまから受けとっている。体受しているのを、彼は言葉に行為に体現した。この「体受体現」は、神の本願を体受体現した者はキリストである。私たちは、「キリストの本願」を体受体現する。

それは、我執が十字架ですっ飛ばされて、そこに聖霊がやってくると、この「体受」ができるわけです。

「十字架ですっ飛ばされる」

なんて、妙なことを言うけれども。私は「無」というでしょ。あれは虚無でも何でもない。禅宗の悟りの無でもない。我なき世界、我執の無い世界です。我執の無い世界を、私の存在の根底にいただいている。相対的人間小池は我執があるでしょう、罪びとでしょう。しかし、その奥に、罪びとでないものを持っている。

私は二重構造だ。クリスチャンは本当は二重構造なんだ。二重構造だけれども、その根底の「無」のところには必ず聖霊がくる。

「無即無限無量」
と言っているのはそのことなんです。この聖霊を受けなければダメです。
「十字架で我がなくなった。それでおしまい」
ではしょうがないんだ。そこに聖霊が必ず入ってくる。
「主さま！」
と祈れば、叫べば直ちに入ってくる。
「なぜ、私を求めないか」
と。無でいい気になっている。ところが、その無を観念的に
「十字架、十字架」
と言っているのが、私が長いことといた無教会なんだ。
十字架と聖霊は離すことができない。聖霊は円（○）で表す。円は無限大を表す。無限無量を表す。
「我無き我」という我は「梵我（ぼんが）」です、宇宙我です。「義」というのは、神さまの御意を行ずる事態が義なんで、それができない。けれども、聖霊が来れば、できる。なしたもう。力がくる。マルティン・ルターが
「本当のクリスチャンは罪びとにして、また義人である」
と言ったのがそのことなんです。

●追求する原動力

10キリストとその復活（よみがえり）の力とを知り、又その死に效（なら）いて彼の苦難（くるしみ）にあずかり、
11如何にもして死人の中より甦えることを得んが為なり。12われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉（とら）えんとて追い求む。キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。13兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前（さき）のものに向かいて励み、
14標準（めあて）を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したもう召（めし）にかかわる褒美を得んとて之を追い求む。

パウロらしいね。普通は、
「大いに努力しろ精進しろ、一生懸命で鍛えろ」
という。くたびれるよ、それは。ところが、既に力が来ているんです。力が来ているから、それで、のほほんとするんじゃない。
「力が来ているから、いよいよもって追求せよ」
と、これが本当の世界なんです。
「救われているから、いよいよ展開していけ」
と。魂も身体も本当の救いにいくのは先のはなしだ、神の国が来てからの話。地上では、

その矛盾構造になっている。

「信仰」の「仰」の字は躓きになる。信じ仰いでばっかりいてはダメだ。「信交」、交わる世界なんだ。キリストと霊的な交わりの世界にある。そうしたら、行動せざるを得ない。パウロは、

「信仰のみ」

と言って、信仰を強調した。

「今までの律法ではなかった」

と。ところが、信仰を強調したパウロは最も激しく動いた。マルティン・ルターがそうです。

「信仰のみ」

と言った彼が一番はげしく動いた。

賀川豊彦が全くそうです。あの人は本当にキリストの僕だね。無教会にあれだけの人はいない。彼はしまいには目が見えなくなってしまった。何回も病気にかかるけれども立ち上がる。みんな、人のためにしょった病です。

「いただいているから、いよいよ追求して、これでいいなんてことはありません」

というわけだ。

愛は最大の力です。パウロの伝道は何か。キリストの愛を、力を、生命を、光を与えないではいられない。止むを得ざるなり、じっとしていられない、というわけだ。

15されば我等のうち成人したる者は、みな斯くのごとき思を懐くべし、汝等もし何事にても異なる思を懐き居らば、神これをも示し給わん。

その通り。「異なる思い」なんて、まるで「歎異鈔」だ、異なることを歎くんだ。神さまが歎異しておられる、異なるものを嘆いておられる。

だから、いくら追求しても、追求する原動力があるから、この追求は楽しいんです――原動力の無い追求は苦しい、しまいにはくたびれてしまう――そして限りなく展開していく。聖霊の世界は無限無量です。その人らしいことがどんどん展開していく。人真似はひとつも要らん。

太陽の光は無色、水滴も無色。無色のものが無色のものにぶつかって、七つの色が発する。聖霊の世界はそういう世界なんです。あなた方一人一人がいろんな色に展開する。それが、音楽の世界なら、大交響楽となる。キリストが指揮者だ。

●国籍は天にあり

16ただ我等はその至れる所に随いて歩むべし。

17兄弟よ、なんじら諸共に我に效うものとなれ、且なんじらの模範となる我らに循いて歩むものを視よ。18そは我しばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。

全くその通り。

19彼らの終は滅亡(ほろび)なり。おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地の事のみを念(おも)う。

「おのが欲を神とし」だ。慾心のかたまりみたいだ。

20されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主(すくいぬし)として其の処より来(きた)りたもうを待つ。

「我らの国籍は天に在り」

と、パウロも早く往きたくてしょうがない。けれども、この天はまた地に通ずる。既に私たちは天国人です、地上にありながら。死を乗り越えた世界です。

「天国は近づきたり、汝ら悔い改めよ」

とキリストが言われたが、「天国は近づきたり」ではない、キリストがあんなことを仰ったけれども。

「天国はここにあり」

なんです、キリストが天国だから。彼は天国人だから。

「私だよ。どこを見ているか。私を見なさい」

と。イザヤ書35章を地上で展開したのはキリストです。黙示録の最後の世界を地上でもって彼は現じていた。天国はキリストの回りにしょっちゅう在った。死人まで甦ってしまった。イザヤ書53章は十字架、イザヤ書35章は聖霊です。

「35|53」（53分の35）

と書く。「53」の十字架が土台。「35」は聖霊。やりきれんね、イザヤ書というのは素晴らしくて。国籍は天にあって、また地にあります。地上を天国にした。なにしろ、始末が悪いです、本当の世界に入ると。「始末が悪い」というのは、いたる所これ天国なんです。その人のいる所に、天国が回りに現じているんだから。

「国籍は天にあり」

と。天は地にあり。大空は地面に接触しているじゃないですか。

●霊の体あり

「著作集第十巻」（『聖書は大ドラマである』１９８８年刊）は、本当に勢いに乗じて書いているから、どの頁も無駄がない。私はそれを自分で読み返してまた自分でもって学んでいる。上からの言葉だから。時々、パウロさんなんか乗り越えてしまう。

「パウロさん、余り理屈っぽすぎるよ」

なんて私は言いたくなる。まぁそれは、人が間違わないようにパウロは懇(ねんご)ろに言っている。パウロというのは大変な人です。これがいなかったら、キリスト教は続かなかった。キリストはそのパウロをとっ捕まえたんだ。キリストに一番反抗しているやつを、大転換させた。

エレミヤだとか、イザヤ、ここらは本当に新約です。詩篇はちょっとまだ足りない。こちらの祈りばっかりでね。祈りというのは、上からの聖言を本当に受けとるのが、本当の祈りなんです。こっちからただお願いすることが祈りではない。祈り入る、祈入です。入って、御意を受けとって、そこから爆発してくるところの祈りは、感謝と讃美と預言になってくる。もう行き詰まりの知らない人になる。

20**されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。**

新約聖書の世界は終末的現在ですから、

「もう、やがていらっしゃる」

と。キリストもそう言っておられた。

「さっぱり来ないじゃないか」

と、それは人の救われんために伸ばしている。伸ばしているけれども、質的にはもっと強くなっている。そして、世の中はだんだんおかしくなってきた。黙示録が言っているように、いつかひっくり返る。こうやって神を無みしていれば必ずひっくり返る。日本は精神的に一番あぶない。また、偽預言者がいて、そんなのにひっかかってしまったら、とんでもない。

何といっても、全聖書の中心は福音書ですから、このキリストにぶつかることです。キリストの言葉は全部、「…せよ」と仰っても、

「必ず私がさせてやるぞ」

と、そういうように受けとっていく。命令ではないですから。愛の力の原動力をもって、キリストはものを言っている。

「人を区別するな。神さまは、善き者にも悪しき者にも、直き者にも直からざる者にも、陽を照らし、雨を降らせているではないか」

と。それを受けとらない方が悪いんだ。せっかく陽が照っているのに窓を閉めたり、せっかく雨が降っているのに傘をさしたりして。

21**彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて、己が栄光の体に象らせ給わん。**

霊体です、霊的な身体になってしまう。

「**血気の体あり、霊の体あり**」

とパウロが言った。もう、その世界を身につけていなかったら、つまらないですよ、信仰なんて言ったって。そして、人のやらない事、嫌がる事が楽しくできる。力がきているからね。やせがまんは要らない。「がんばれ」なんて、ひとつも頑張らない。くたびれるよ、がんばったら。

「力が来てしょうがありません。私は頑張りませんよ」

と言ってやれ。